

境界空間としての宇治

— 『源氏物語』 「俗聖」 をめぐって —

森木 三穂

(二〇一六年十二月十六日受理)

キーワード 『源氏物語』 俗聖 宇治 境界

一. はじめに

光隠れたまひにし後、かの御影にたちつぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり。
(匂兵部卿卷 一七頁)

『源氏物語』第三部は光源氏の死後の物語として、その子孫を中心に描かれる。光源氏の子である薫は自己の出生に疑念を抱き、現世離脱への関心が強い。その薫が理想とする生き方が「俗聖」であった。

宇治で生活をする八の宮の俗体のまま道心を保つ聖の境地に「俗ながら聖になりたまふ心の掟やいかに」(注①)と関心を寄せる。この「俗聖」という語は『源氏物語』中、次の一例しかない。

この阿闍梨は、冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり。京に出でたるついでに参りて、例の、さるべき文など御覧じて問はせたまふこともあるついでに、「八の宮の、いとかしこく、内教の御才悟深くものしたまひけるかな。さるべきにて生まれたまへる人にやものしたまふらん。心深く思ひすましたまへるほど、まことの聖の掟になん見えたまふ」と聞こゆ。「いまだかたちは変へたまはずや。俗聖とか、この若き人々のつけたなる、あはれなることなり」などのたまはず。

(橋姫卷 一二八頁)

しかも、この語は当時、慣用されている表現ではなかったようだ。(注②)

第三部がそれ以前の光源氏の物語と大きく違う点は舞台設定にもある。それ

までは都を中心として描かれていた物語が、第三部では宇治に中心を移す。なぜ、宇治でなければならなかったのだろうか。また、薫が理想とした「俗聖」はなぜ「俗聖」は宇治に存在したのだろうか。しかも、なぜ慣用されていない表現を用いたのだろうか。

本稿では宇治と「俗聖」の関係性について境界空間という視点から一見解を提示することを目的とする。

二. 「宇治巻」という呼び名

一条兼良による注釈書『花鳥余情』は『源氏物語』第三部を「宇治巻」と表記している。その由来を次のように述べる。

抑応神天皇と申は宇佐宮八幡大菩薩におはしますその御子このかみを鷯鷯のみこと申御おとうとを菟道稚子と申けり(中略)宇治といふ所によしある山さとのありけるにうつろひ給へれはうちのうはそくの宮とはなつて侍るなりむかしのうちわか子はこのかみに位をゆつりてうちにこもり

給へり此八宮は御おとうとに東宮をこされて宇治にかくれ侍りる事なるやうなれとそのほいをとけすして世をうち山に名をのかれ侍るそのあと相にたるうへ共に兄弟のあひたの事なればかたく宇治の巻とは申つたへ

侍るなり(注③)

『日本書紀』巻第十・誉田天皇、応神天皇の四十年の春正月の話、巻第十一・大鷦鷯天皇・仁徳天皇の即位前紀から菟道稚郎子兄弟の跡目争いを引用する。(注④)そして、『源氏物語』では八の宮が宇治に移り住んだ原因が、兄弟である冷泉院との跡目争いであったこととの共通性から第三部は「宇治巻」と呼ぶことになったという。『源氏物語』第三部の構造として、「宇治」という場所の要素が色濃く影響し、解釈されていたことが伺えよう。また、三田村雅子氏

は『源氏物語』の続篇は〈外部〉を絶えず増殖し、その〈外部〉と〈内部〉の対立・緊張構造の中に世界を構築していく、新しい、正篇とはまったく違った物語である。(中略)宇治の物語は、そのような恋愛物語を成り立たせる「場」自体の論理を問はずものだと見えよう。(注⑤)。

と述べ、物語の構成に「場」の設定が重要であったと言及している。

三・宇治の持つ役割

三・一 交通の要衝

それでは宇治は当時どのような場所として認識されていたのだろうか。まず、『蜻蛉日記』や『更級日記』の初瀬詣の様子から、交通の要衝であったことがわかる。

すべて道もさりあへず、物の心知りげもあき怪しの童べまで、ひき避きて行き過ぐるを、車を驚きあざみたること限りなし。これらを見るに、げにいかに出で立ちし道なりともおぼゆれど、ひたぶるに仏を念じ奉りて、宇治の渡に行き着きぬ。そこにも猶しもこなたさまに渡りする物ども立こみたれば、舟のかち取りたる男ども、舟を待つ人の数もしらぬに心おこりしたる気色にて、袖をかいまくりて、顔にあてて、さおにをしかりて、とみに舟も寄せず、うそぶいて見まわし、いとみじうすみたるさま也。無期にえ渡らで、つくづくと見るに紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにも住ませたるならむと、ゆかしく思し所ぞかし。(注⑥)

また『源氏物語』においても

二月の二十日のほどに、兵部卿宮初瀬に詣でたまふ。古き御願なりけれど、思しも立たで年ごろになりけるを、宇治のわたりの御中宿りのゆかしさに、多くはもよほされたまへるなるべし。

(権本卷 一六九頁)

とあるように、宇治は初瀬詣の途中の中宿りの場であったことがわかる。

今井源衛氏は

大和―近江、大和―平安京の交通の要衝を占める地にあり、戦略的に重大な役割を荷う地であった。またそれだけに、平安期にもその地にまつわる幾多の血なまぐさい事件も想起されたにちがいない。要衝に据えられた関所には、とかく厳しく暗い印象を伴いがちであるが、少なくとも平安前期、九世紀半ばごろまでの人びとにとっては、その地は、単なる都人の遊楽の地とだけでは済まされない、畏怖の要素が感じられていたであろう。その感情が一〇世紀後半の人である紫式部にとっては、全く無縁であったかどうか、それは、なお慎重に考える必要があるだろう。(注⑦)

と述べている。

三・二 「憂し」宇治

今井氏の述べる「畏怖の要素」とは

わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうち山と人はいふなり(注⑧)が影響している。『古今和歌集』巻第一八・雑歌下 九八三・喜撰法師のこの歌は、「うち」に「憂し」が掛けられていると解されており、前述の跡目争いが繰り広げられた菟道稚郎子伝説と併せて、宇治には「憂し」という憂いの感情のイメージが賦与されるようになった。また、この喜撰法師の和歌はあとたえて心すむとはなけれども世をうち山に宿をこそかれ

(橋姫巻一三〇頁)

という八の宮に通ずると解釈され、より一層宇治における「憂し」のイメージを濃くする。

物事が思うようにならないために鬱屈した感情を表現する「憂し」。この感情は厭離穢土、現世離脱の契機にもなる。都から離れた山里が持つ歴史的な背景と、華やかな都に対する物侘しい鄙の山里。『源氏物語』において都の華やかさから、しがらみから逃れるため、出家をした人物たちは鄙へ向かう。その鄙を第三部では舞台の中心に据えた。これは第三部があえて人間の暗い部分に焦点を当てたかのような設定である。

三・三 歌枕としての宇治

宇治へのイメージを考えるにあたって、歌枕としての宇治を取り上げたい。和歌に宇治は多く詠まれ、特に宇治川は宇治を代表する風景として詠まれてきた。前掲の『更級日記』初瀬詣でも船の舵取りが登場し、宇治川を渡って旅をする様子が分かる。また、宇治川では網代による氷魚漁が盛んに行われ、宇治川とともにこれらの景物も和歌に詠み込まれている。例えば『萬葉集』巻第三・雑歌・二六四には柿本人麿の

歌一首

柿本朝臣人麻呂。近江国より上り来る時に、宇治河の辺に至りて作るものふの八十宇治川の網代木にいさよふ波の行くへ知らずも(注⑨)や、『古今和歌六帖』巻第三・一五二四には

うち川のせせにありてふあじろぎにおほくのひをもわびさするかな(注⑩)

があり、後代に至るまで宇治川と網代、氷魚の取り合わせは多い。

一方、『源氏物語』の作中和歌で網代や氷魚を詠んだ和歌はない。しかし、宇治が『源氏物語』に初めて登場する場面にも宇治川は欠かせない要素として

登場する。

かかるほどに、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき世に、あさましうあへなくて、移ろひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに渡りたまふ。思ひ棄てたまへる世なれども、今はと住み離れなんをあはれに思さる。網代のけはひ近く、耳かしがましき川のわたりにて、静かなる思ひにかなはぬ方もあれど、いかはせん。花紅葉、水の流れにも、心をやるたよりに寄せて、いとどしくながめたまふより外のことなし。

(橋姫巻 一二六頁)

これは八の宮邸が焼失し宇治に移り住む場面だが、八の宮の視点から山と川が印象的に描かれる。また、宇治の八の宮邸は「いとど山重なれる御住み処」であり、舞台は宇治山と宇治川によって形成された風景なのである。

三・四 都と鄙という対比構造

廣田收氏は宇治の舞台設定理由を次のように述べる。

宇治という地が、都を相対化する視座を設定するために要請されたからだと見える。(中略) 離宮神と橋姫との対偶は、『源氏物語』宇治十帖では、都人を鄙の側から待ち受けるものとして、都に対する鄙という対立を基本とする物語として設定されている(注⑩)。

都と鄙という対比関係は、『源氏物語』第三部の描写のあちらこちらに読み取れる。高橋亨氏も

より限定的にいえば、〈宇治〉の物語地理において、八の宮と二人の姫君たちの時空が〈川〉であり、阿闍梨の〈山〉と対位的に提示されているのである。その両者を内包した〈宇治〉が、〈都〉に対置されて物語世界の構図は成立する。(注⑫)

と述べるように、都があつて初めて宇治という舞台の意味が生まれる。宇治十帖は宇治だけで物語が終始するのではなく、必ず都との対比が描かれ、そこで様々な問題が生じているのだ。

四・宇治という境界空間

四・一 境界を生きる人物

宇治は交通の要衝として都と各地をつないできた。そこは山と川によって隔てられた鄙であり、憂いを帯びた場所である。この宇治と都とを行き来したの

が薫、匂宮という光源氏亡き後の貴公子たちであった。彼らは都に拠点を置く人物であつて宇治の者ではない。薫も噂では耳にしていた宇治を直接訪問し、

げに、聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなしことそぎたり。同じき山里といへど、さる方にて心とまりぬべくのだやかなるものもあるを、いと荒ましき水の音、波の響きに、もの忘れうちし、夜など心とけて夢をだに見るべきほどもなげに、すごく吹きはらひたり。(橋姫 一三二頁)

と八の宮邸の周りの荒々しさに驚きを隠せない。しかもその八の宮邸には「あやしき下衆など、田舎びたる山がつどものみ」が稀に訪れるという。都とはまったく違う風景がそこには広がっていたのだろう。都の人間である薫と匂宮の二人が

「荒さじと思すとも、いかでかは。心やすき男だに、行き来のほど、荒ましき山道にはべれば、思ひつつなん月日も隔たりはべる(以下略)」(宿木巻 三九八頁)

という険しい山道を越えて八の宮の姫君、大君・中の君、そして浮舟の元へと通う。その往來の描写が都と宇治の違いを鮮明にし、対比構造を創り上げていく。都と鄙の境界を彼らは何度も行き来した。境界に生きるものとして存在したのである。

しかしこれは二人に共通することではない。匂宮も薫も山道を通って宇治に通つていたが、匂宮は都に縛られ立場上身動きが取れないため、中の君を都の邸宅に呼び寄せるなどする。匂宮の拠点は都であり、その華やかさは都の象徴たる人物であつた。一方の薫は都に縛られることなく宇治と都を行き来する。薫こそが境界に生きる存在なのである。

四・二 宇治内部の境界空間

この境界性は都と宇治という場所にとどまらず、宇治の中でも宇治川がその働きをする。前述した匂宮の中宿りの場面を引用する。

六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、御設けせさせたまへり。(椎本巻 一六九頁)

匂宮や薫のいる別荘は宇治川を隔てて向こう側、こちら側は八の宮邸である。川を境界として宇治の中にも都と鄙という構図が再現される。川は空間の隔てとして機能しているのだ。

また、都と宇治を隔てる役割として山や川のほかに霧がある。八の宮邸は

川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。入りもてゆくまに霧ふたがりて、道も見えぬしげ木の中を分けたまふに、いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の散りかかると冷ややかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。かかる歩きなども、をさをさならひたまはぬ心地に、心細くをかしく思されけり。

(橋姫巻 一三六頁)

というように、舟の用意もせず馬で行くことができた。面倒なく簡単に行くことができた。しかし、邪魔をするのが霧である。辺り一面に立ち込めた霧は薫の行く手を阻み、恐怖心を与える。「かかる歩き」をしたことがない都人の薫に対する障害として立ちはだかる。この霧は宇治の姫君を垣間見るときにも「霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。」と邪魔をする。霧による隔てはこの他にも夕霧巻に見られる。

日入り方になりゆくに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、蝸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしう見ゆ。(中略)所がらよるづのこと心細う見なざるも、あはれにも思ひつづけらる。(中略)しめやかにて、思ふこともうち出でつべきをりかなと思ひあたまへるに、霧のただこの軒のもとまで立ちわたれば、「まかでん方も見えずなりゆくは。いかがすべき」とて、

山里のあはれをそふる夕霧にたち出でん空もなき心地してと聞こえたまへば

山がつのまがきをこめて立つ霧も心そらなる人ほとどめず

ほのかに聞こゆる御けはひに慰めつつ、まことに帰るさ忘れはてぬ。

「中空なるわざかな。家路は見えず、霧の籬は、立ちとまるべうもあらずやはせたまふ。つきなき人はかかることこそ」などやすらひて、

(夕霧巻四〇一頁)

夕霧が落葉の宮の母、御息所を見舞うために山城国愛宕郡の比叡山の麓・小野にある山荘を訪れる場面である。小野も宇治同様、鄙であり、山里である。落葉の宮への恋心を募らせていた夕霧の前に霧が立ちこめ、不安な気持ちにさせる。またその霧を理由に留まるのだが、結局は拒まれる。ここでも霧は恐怖を与えると同時に隔てとして機能している。

五. 「俗聖」と宇治

「俗聖」は在俗の仏道修行者と認識される。俗と聖は相対する存在であるが、

「俗聖」はそのどちらにも属さない。いわば境界に生きる存在である。都で俗聖は存在し得たか。山奥で俗聖は存在し得たか。宇治という境界空間でなければ俗聖は存在し得なかったのではないだろうか。

境界空間を作り出した宇治の山、川そして霧という隔ては薫にとってどのような影響があったのか。まず、八の宮や宇治の姫君への関心は隔てがあったゆえに強くなっただろう。また、隔てによる孤立は自己を見つめるきっかけになった。孤立することで自己の出自に関する疑念を増大させる。宇治に立ち込める霧は薫の疑念や苦悩の象徴として描かれているのではないだろうか。

生きにくいと感じていた薫のその「生きにくさ」を象徴するかのようなさまざまな隔て。都という社会の内部にいた薫は、自分とは他の人とは違っていると抱いていた。薫は自己を、自分の居場所を求めて都の外部である宇治へと向かう。外に行けば何か見つかるかもしれないとの期待からである。そして出会ったのが「俗聖」という生き方であった。

聖は僧とは違い、本寺から離れて山野の草庵などで修行していた。(注⑬)また、都の内部に入りする僧に比べ、聖は都と距離のある場所に存在した。(注⑭)都の内部ではなく宇治で「俗聖」が存在した理由は、聖であるためには都から離れた場所である必要があったからである。そして「俗聖」であるためにはそれを表すかのような境界空間が舞台となる必要があったのである。宇治という場所は様々な隔てを持ち、心を揺れ動かす要素があった。「俗聖」という身と心の狭間、俗と聖の狭間に位置する存在の心の揺れと葛藤をより効果的に描き出すにはこの境界空間である宇治という舞台が重要であり、考えられた舞台設定だといえよう。そしてその狭間を表現するために「俗聖」が相応しかったのだ。

六. おわりに

ここまで宇治の境界性と「俗聖」の関係を見てきた。「俗聖」という語は『源氏物語』以前にはほとんど見られず、紫式部の造語という可能性が高い。(注⑮)それを踏まえて物語を読むと、宇治十帖の中心となる薫が目指す「俗聖」はその舞台、人物の描き方すべてに影響を与えていることが見えてくる。つまり、宇治十帖で描かれたすべてが揺れ動く境界性をはらんでいるということだ。宇治という場所、人物造型、言葉の選び方すべてが繋がっている。そこが『源氏物語』の魅力であり、難しさでもある。

なぜこのような語を生み出し、このような世界を描いたのか。この点につい

ては次稿にまとめたい。

【注】

『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』に拠る。

①橋姫巻一一八頁

②拙稿『源氏物語』における「俗聖」の造語性―「優婆塞」との関係から―
 (『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』第四九号)にて詳述。

③伊井春樹編「松永本 花鳥余情」

源氏物語古注集成第一巻 一九七八年四月一五日 桜楓社 二八八頁

④『日本書紀①』新編日本古典文学全集二

小島憲之 直木孝次郎 西宮一 蔵中進 毛利正守

一九九四年四月二〇日 小学館 四九五頁

『日本書紀②』新編日本古典文学全集三

小島憲之 直木孝次郎 西宮一 蔵中進 毛利正守

一九九六年一〇月一〇日 小学館 一九頁

⑤三田村雅子著「宇治十帖 その内部と外部」

岩波講座日本文学史第三巻 一一・一二世紀の文学

一九九六年九月九日 岩波書店 三一頁

引用部分、「そのような物語」とは正篇の光源氏物語における「色好みのおの諸相」を指す。

⑥『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』

新編日本古典文学全集二六 藤岡忠美 中野幸一 犬養廉 石井文夫 一

九九四年九月二〇日 小学館

⑦今井源衛著「源氏物語の思念」笠間叢書二〇六

一九八七年九月三〇日 笠間書院 一一五頁

⑧『古今和歌集』新編日本古典文学全集一一

小沢正夫 松田成徳 一九九四年一月二〇日 小学館

⑨『萬葉集①』新編日本古典文学全集六

小島憲之 木下正俊 東野治之 一九九四年九月二〇日 小学館

⑩「新編国歌大観」角川書店 CD-ROM

⑪廣田收著「源氏物語」系譜と構造

二〇〇七年三月三十一日 笠間書院 三三四頁

⑫高橋亨著「源氏物語の対位法」

一九八二年五月一〇日 東京大学出版会 一七四頁
 ⑬若紫巻 二〇〇頁

峰高く、深き岩の中にぞ、聖入りあたりける。

頭注に「聖」は、本来は高德の僧であるが、この時代は本寺から離れて草庵などを構え、修行に専念する念仏行者の称」とある。

⑭注②と同じ

⑮注②と同じ